

国際シンポジウム「Hokudan-2000」及び 地震研究所研究集会「活断層研究のフロンティア」参加報告

渡 邊 トキエ (地球流動破壊部門)

はじめに

活断層研究だけをテーマとしたシンポジウムとしては東アジアにおいて初めての国際シンポジウムが、日本において開催された。ミレニアムに入って間もない1月17日から26日にかけて、1995年兵庫県南部地震の地震断層である野島断層の地、兵庫県淡路島北淡町において行われた「Hokudan-2000」(正式名称: The Hokudan International Symposium and School on Active Faulting)である。この企画に合わせ、地震研究所共同利用研究集会「活断層研究のフロンティア—兵庫県南部地震から5年間の総括—」が1月22日に現地で開催されることになった。そこで、年度末のあわただしい時期ではあったが、部門教官の理解と協力を得て私も会議のほぼ全コースに参加させていただいた。

事務局が「世界最大・最強の活断層シンポジウム」と銘打ったこの国際会議には、文字通り、世界22の国と地域から約60名、国内からは一般参加者を含めた200名以上が参加した。会議の多くは英語で行われて、登録参加者の全員が一ヶ所に宿泊し、ほぼ一週間貸し切りバスで会場と宿舎のホテルの往復だけという合宿形式のシンポジウムであった。

会期中からあちこちで賞賛の声が聞かれ、次回をお世話する人は大変だろうという感想がたほど大盛会のうちに散会したこの会議であるが、その成功は主として個人の手腕に負っている。とくに私が感銘を受けたのは、プログラミングとマネジメントのすばらしさだった。そこで、会議について概要を報告すると共に、感想を交えながら、良く練られたプログラムやスムーズなセッション運営、隅々にまで行き届いた細やかな配慮など、その一端をご紹介したい。

会議の目的と背景、組織

2000年1月15日、兵庫県南部地震からちょうど5年目を迎えた。会議は、これを機にその後の日本の活断層研究や関連する諸分野の研究を世界的な活構造研究の流れの中で見直して、これからの研究、応用の両面で世界的に役立つようというものである。この目的のために、

- a) 1990年代の世界の活断層研究とそれに基づく地震災害軽減の動向をレビューする、
 - b) 兵庫県南部地震後の日本の活断層研究を総括する、
 - c) 21世紀に向けて断層と地震の国際的な研究の課題とその解決について討論する、
 - d) 学問分野や行政・大学・研究所・民間の垣根を取り払った交流を進める、
 - e) アジア・太平洋地域の発展途上国に活断層研究・地震災害軽減技術の移転をはかる、
- などの項目が具体的な目的としてあげられた。

この背景には、1) 5周年にあたり、活断層研究をあらためて見直して成果を有効に使う必要があること、2) トルコ・台湾の大震災は既知の活断層から引き起こされ、活断層研究とその応用がつよく期待されていること、3) 世界的な視野に立って地震災害とその研究に関する知識と経験の交流が必要であること、4) 地震災害に対して脆弱な国々とくに発展途上国への活断層調査研究技術の移転が緊急の課題であること、といった日本の活断層研究者達の共通認識があった。

主催者は北淡町、北淡町教育委員会、国際リソスフェア研究計画(ILP)タスクグループII-5(大地震の繰り返しについて研究するグループ)、II-2(世界活断層のマップの作成を目的とするグループ)である。ただし、このように広い趣旨のために、工業技術院地質調査所、日本学術会議第四紀研究連絡委員会、国際第四紀研究連合ネオテクトニクス委員会が共催し、科学技術庁・建設省国土地理院・文化庁・兵庫県・兵庫県教育委員会・日本地質学会・日本地理学会・日本第四紀学会・土木学会・応用地質学会・日本地形学連合など多くの学会や機関が共催している。

また、本会議の立案者である広島大学文学部地理学教室の奥村晃史助教授が実行委員会事務局の中心となった。シンポジウム組織委員会、実行委員会のメンバーは表1,2の通りである。主な参加者を資料に示す。

会議の概要

会議はシンポジウムとスクールを中心に構成された。あらかじめ登録を行った人だけが参加できるプログラムと誰でも受講したり聴講できる公開のものがあり、日によ

表 1. 北淡国際活断層シンポジウム組織委員会

| | | |
|-----|-----------------|--|
| 会長 | 小久保正雄 | 北淡町町長 |
| 副会長 | Daniel Pantosti | イタリア国立地球物理研究所・ILP II-5委員長 |
| | 松田時彦 | 西南学院大学文学部教授・野島断層保存館名誉館長 |
| 委員 | 井高孝一 | 北淡町助役 |
| | 境 茂 | 北淡町教育長 |
| | 中谷欽輔 | 北淡町震災記念公園総支配人 |
| | 岡田篤正 | 京都大学理学研究科教授・野島断層活用委員会委員 |
| | Alan Hull | New Zealand Ministry of Research, Science and Technology |
| | | ILP II-3副委員長 |
| | 衣笠善博 | 東京工業大学大学院総合理工学研究科・ILP II-3委員 |

表 2. 北淡国際活断層シンポジウム実行委員会

| | | |
|-----|------|---------------------------|
| 委員長 | 中田 高 | 広島大学文学部教授・野島断層活用委員会委員 |
| 委員 | 岡田篤正 | 京都大学理学研究科教授・野島断層活用委員会委員 |
| | 千田 昇 | 大分大学教育学部教授・野島断層活用委員会委員 |
| | 加藤茂弘 | 兵庫県立人と自然の博物館・野島断層活用委員会委員 |
| | 宮本 肇 | 北淡町企画振興課長・震災記念公園係長 |
| | 中谷公一 | 北淡町教育委員会社会教育課長 |
| | 奥村晃史 | 広島大学文学部助教授・ILP II-5・INQUA |
| | 堤 浩之 | 京都大学理学研究科助手 |
| | 佐竹健治 | 通商産業省工業技術院地質調査所主任研究官 |

資料 主な参加者

| | |
|---------------------|--|
| David P. Schwartz | (U.S.Geological Survey) |
| Robert S. Yeats | (Oregon State University) |
| Steven G. Wesnousky | (University of Nevada) |
| David D. Jackson | (University of California Los Angels) |
| Chesley Williams | (Risk Management Solutions, Inc.) |
| Earl W. Hart | (California Department of Mines and Geology) |
| Jill H. Andrews | (Southern California Earthquake Center) |
| Robert Reitherman | (California Universities for Research in Earthquake Engineering) |
| Aykut Barka | (Istanbul Technical University) |
| Thomas K. Rockwell | (San Diego State University) |
| Hung-Chie Chiu | (Institute of Earth Sciences, Academia Sinica) |
| Paul Somerville | (URSGWC Federal Service) |
| Kerry Sieh | (California Institute of Technology) |

ては数カ所を会場としていくつかのプログラムが並行して行われた。表3にプログラムを示し、日程に沿ってその内容を紹介する。

1. 公開学術シンポジウム (1月18日~19日)

東京から遠い淡路島がシンポジウムの開催地であるため、私は前日の17日に現地に入り、その夜の小さな ice-breaker (前夜祭) から参加することになった。

1月18日、10日間に及ぶ会議の開催に先立ち、オープニ

ングセレモニーが北淡町民センターにおいて公開で行われた。まず、小久保正雄北淡町長が歓迎のスピーチをされた。以前はビジネスマンとして海外勤務経験のある町長は、流暢な英語で、この国際会議を北淡町で開催する意義について述べられた。前述したが、この淡路島には1995年兵庫県南部地震の地震断層である野島断層が走り、北淡町では地震で地表に現れた断層部分に野島断層保存館を建て保存している(図1)。そして、この保存館建設にあたっては、貴

表 3. プログラム

| | プログラム | 日 程 | 公開・非公開 | 使用言語 |
|----|---------------------|-----------|-------------|----------|
| 1) | 公開学術シンポジウム | 1月18日～19日 | 公開 | 英語 |
| 2) | スクール | 1月20日～21日 | 参加者公募(選考有り) | 英語 |
| 3) | 地震研究所共同利用研究集会 | 1月22日 | 公開 | 日本語 |
| 4) | 巡検(野島断層) | 1月22日 | 登録参加者のみ | 英語 |
| 5) | 対話集会 | 1月22日 | 公開 | 英語(通訳有り) |
| 6) | 地層抜き取り装置(ジオスライサー)実演 | 1月22日 | 公開 | 日本語 |
| 7) | 講演会 | 1月23日 | 公開 | 英語(通訳有り) |
| 8) | エクスカージョン(四国/中央構造線) | 1月24日～26日 | 登録参加者のみ | 英語 |

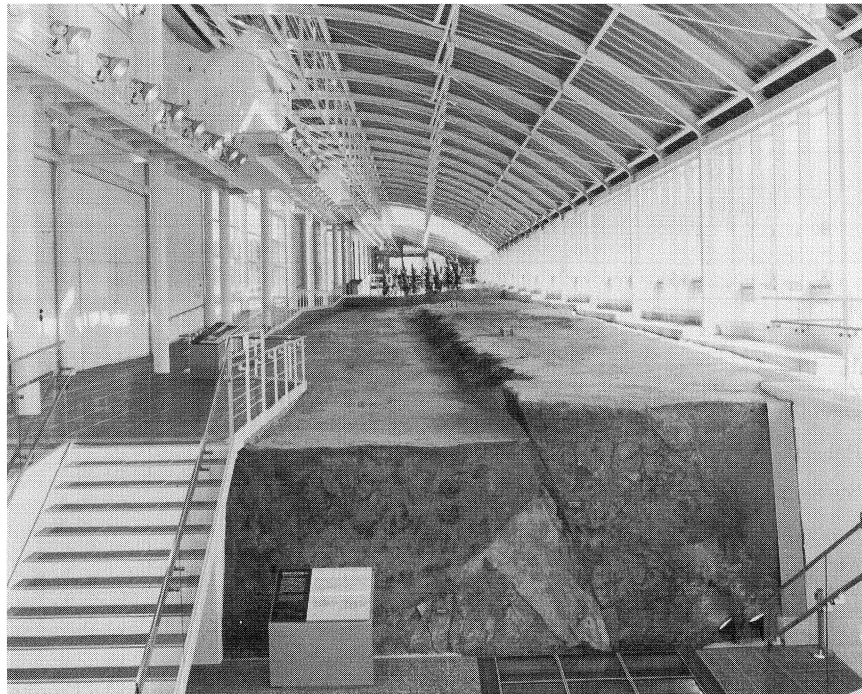


図 1. 野島断層保存館

重なり地質学的証拠を保存し後世に役立てたいという広島大学の松田時彦先生や京都大学の岡田篤正先生、西南学院大学の松田時彦先生など活断層研究者達の強い願いと町への働きかけがあった。町はやがて、この場所を観光地のように利用するだけでなく、北淡町が文化的なメッセージの発信地として復興、発展することを願い整備を始める。それを積極的に推進してこられた町長である。

ご挨拶の後さっそく、公開学術シンポジウム「活断層研究とその応用—21世紀にむけて」が始まった。東京大学の米倉伸之教授が日本における活断層と地震に関する研究の沿革史を紹介し、D. Schwartz 博士が古地震学の研究とその応用について話されるなど、まず日米のリーダー達が基

調講演を行い、2日間の会議の緒が切られた。18日に8件、19日に10件の講演は、一人の時間がおおよそ50分で、すべて日本語の通訳無しに英語で行われた。活断層と地震の関係についての基礎的研究の成果や最近の日本における活断層研究の総括など、講演は聴衆が専門家だけではないことが考慮されていて全体に分かりやすいものだった。中でも私には、カリフォルニアの活断層法の制定に関わってこられた E. Hart 博士の話や、行政者として研究と社会の橋渡しの仕事に携わっている女性 J. Andrew さんの発表などが目新しいものとして映り、日本の現状と比較しながら興味深く伺った。

30分の休憩時間にはロビーで繰り広げられているポス



図 2. オープニングセレモニー



図 3. 公開学術シンポジウム



図 4. 歓迎パーティ

ターセッションの短かな口頭発表が行われたが、これは期間中合間合間に差し挟まれ、とても面白い試みだった。一人5分ほどの持ち時間に自分の研究について紹介し、学生の場合はこれからやってみようことなども英語でスピーチする。とくに若手や在野の研究者にとっては、内外の著名な研究者と大勢の聴衆に自分をアピールできる絶好の機会のようにであった。また、これによって、会議参加者の全てが何らかの発表をしたことになり、互いの理解と交流を深める意味でも効果的だったと思う。全部で90件ほどであった。

初日のこの夜は、登録参加者の宿舎となったホテルで北淡町による歓迎パーティも催された。町は会場に阿波踊りの方を招いて遠い外国からの参加者を歓迎した。耳に馴染

んだお囃子と共に子供や青年の踊り子達が突然会場に現れた時は皆驚いて取り囲んだ。海外からのお客さまといえば、地震研究所で一時を過ごされた Wesnousky さんや Somerville さんとは十数年ぶりの再会だった。活断層のトレンチ調査のパイオニア的存在であり、本でも馴染みの深かった Sieh さんは、この夜一足遅れて到着した。

2. スクール (1月20日~21日)

3日目からは会場を震災記念公園セミナーハウスに移し、登録参加者のみによるスクールが2日間の日程で開催された。北淡町震災記念公園の一角に建つこのセミナーハウスは、会議開催が決定してから町が急ピッチで建設したものである。これからも会議場としていろいろなセミナーに利用してもらおうと同時に学術的な資料館としても整備し

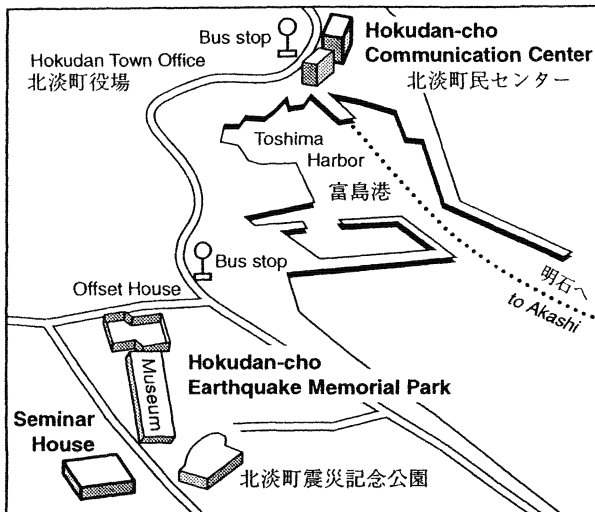


図 5. 会場配置図

ていきたい、と中谷欽輔震災記念公園総支配人のお話だった。期間中、ハウスの一室には数台のコンピュータも備えられたが、いつも、長期不在中のメールをチェックしたり日本の活断層研究の最新のグラフィックデータを興味深そうに眺める海外からの研究者で賑わっていた。

スクールは次のように進められた。まず、講師として、世界の一流研究者が長期的地震危険度評価、大地震の再来モデル、テクトニクスなどのテーマについて最新の研究成果を紹介する。そして問題などを提起する。すると、それについて講師相互が議論を交わしたり、また、参加者全員が加わって議論をするという具合である。講義形式の発表という形をとったこのスクールでは、活断層の専門家だけでなく、関連分野の研究者から大学院生までが活断層研究とその応用の最先端を把握できることを目指していた。

私はこれまでこのような国際研究集会に出席してゆっくりと講演を聴いたことがなかったので、とくにアメリカの発表者達の美しい図面や debate (議論) の巧みさ、自己アピールのうまさには圧倒された。だが、難解な研究について限定した参加者で緊張した議論が進められたこの場では、英語のことばが聞き取れず、活発に交わされた議論の大半を私は理解できなかった。語学の点だけをとって私には大きな啓発の機会だった。モンゴルなど日頃あまり馴染みの無い国、しかも人のあまり住まない地域に存在する活断層のお話を伺うのも初めてのことであった。

発表と議論が繰り返される間、会場では終始 3~4 人の大学院生が中田先生や奥村先生に京都大学の堤浩之助手が加わった 3 人の教官の指示のもとで働いていたが、その真剣な態度はとて好感のもてるものだった。彼等にとってもなかなか経験できない貴重な学習の場であったとはいえ、このシンポジウムは広島大学や京都大学大学院生の献身的な働きがなくては成り立たなかった。606 頁にのぼる

シンポジウム予稿集の英文アブストラクトも、院生 2 人が 2 ヶ月かかってまとめたと伺っている。

ここで、今回のシンポジウムについて、運営の資金や体制などについて説明する。

今回の会議は広島大学の奥村先生が立案された。その案に全面的に賛成され、積極的な支援と協力を行われたのが同大学の中田先生である。先生はさっそく北淡町の小久保町長に働きかけて資金援助の協力を得た。そのようなわけで、この国際会議の経費の多くは北淡町からの補助金に拠っている。そして、中田先生が外部との交渉を一手に引き受け一つ一つと体制を整えられる中で、奥村先生は会のアレンジメントから、プログラミング、海外参加者の渡航手続き、アナウンスに至るまで、必要な事務処理の一切をほぼ一人で行われた。会議の実際の運営には、堤助手や広島大学、京都大学の大学院生、北淡町役場の方達、そしてお揃いのピンクのハッピー姿の住民ボランティアがあたり、会場内は大学人、受付は主に北淡町の方々が担当して英語のガイド役まで務めた。まさに大学と町の住民が一体となって作り上げている手作りのシンポジウムという印象だった。

3. 地震研究所共同利用研究集会 (1 月 22 日)

始まってから 4 日間というものは、連日英語だけによる発表と討論が続いた。昼は会議、夜の宿でもトルコのイズミット地震や台湾の集集地震、モンゴルの地震断層などについてのミーティング、ホテルと会場の往復のバスの中も議論の声、という毎日である。送迎バスは 1 日に 1 台。会場から遠い、淡路島中部の見晴らしの良い高台に位置するホテルを朝出立したら、夕刻まで迎えに来ない。会議が中半にさしかかり、人々も疲れを感じ始めたそんな頃、事務局はさらに面白いプログラムの組み合わせを用意していた。

22 日には北淡町震災記念公園セミナーハウスで、「活断層研究のフロンティア—兵庫県南部地震から 5 年間の総括—」と題する地震研究所研究集会が 9 時から 3 時まで、公開で開催された。地震研究所から 1999 年度共同利用研究集会として採択され、配分された旅費は約 133 万円である。この研究集会について、責任者の中田先生と私との間で事務的な作業に入ったのは 11 月に入ってからのことだった。先生は約束の時期までにきちんと 20 数名の参加者リストを送ってくださり、最終的に 30 名が確定した年末までは、私も参加者とのメールのやりとりやお金の計算に追われた。

中田先生がアレンジをされたこの研究集会には、遠隔の地で年度末というあわただしい時期にもかかわらず、24 の研究発表に 90 人を超える人々が参加した。集会の目的は、1) 兵庫県南部地震以来社会の注目を浴びることになった活断層研究の最近 5 年間の成果を報告して、研究の到達点

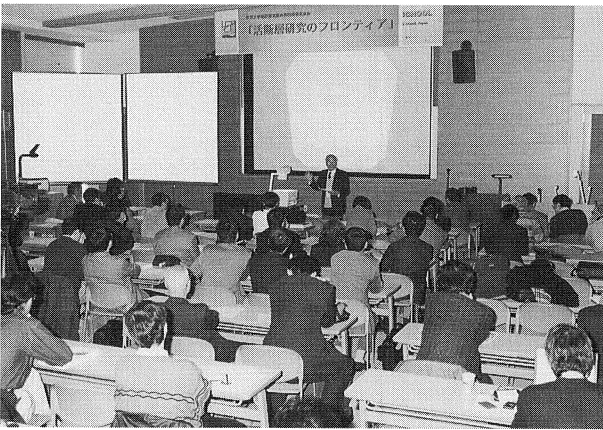


図 6. 地震研究所研究集会



図 7. 野島断層巡検

を確認すること, 2) 21 世紀に向けて活断層研究は何を指すべきかを議論すること, である. プログラムは, 第 1 部「活断層研究の到達点」, 第 2 部「活断層研究のブレイクスルーを目指して」から構成された. 中田先生は, 一人一人の発表時間を比較的短くして後の議論に多くの時間をさき, それぞれの発表セッションのコーディネーターが議論をまとめて後の総合討論の場でオープンに討論する, という方法をとられた. また, 1995 年以来国家的規模で行われている各地の活断層調査に関与している方たちを大学・機関から広く選ばれて, 率直な意見の交換の場を提供された. オープンディスカッションの議論は白熱した. 終了予定時間を大幅に越えて, 同会場で 3 時から開かれることになっている住民との対話集會に集まった人々をしばらく待たせてしまったほどである.

「始めにまず現象ありき」. 自然現象の現場を歩かずにデータのみで理論を構築する若い人達の増加や, 自然を論理に合わせて考えようとする風潮を危惧する地質・地形学者の指摘が, 私には印象に残った.

この研究集會の学術的成果は, (株) 海洋出版から「月刊地球」特別号として出版の予定である.

4. 巡検 (1 月 22 日) 野島断層

久しぶりに日本語による会議が行われているこの間, 外国からの参加者は一部日本人研究者と共に, 通産省工業技術院地質調査所の栗田泰夫さんの案内で野島断層を巡検していた. この巡検については, 参加した地震研究所遠田晋次助手が地震学会ニュースレターに書いておられるのでご覧いただきたい.

5. 対話・交流集會 (1 月 22 日)

そして予定を遅れること 30 分. 研究集會とエクスカッションの参加者がセミナーハウスに合流し, 今回の会議中の大きな催し物のひとつである住民と研究者との対話・交流集會「世界の活断層なんでも百科」が開催された.

この対話集會は心に残るものだった. このような集會は



図 8. 対話集會

おそらく世界でも例が無いのではないかと海外からの参加者の話だった. 会場では, 内外の研究者と住民とが向かい合って着席した. そこへ, 「語り部」と呼ばれる兵庫県南部地震の様子を伝える 4 人の人達が紹介され, 一人ずつ, 5 年前の早朝突然自分や家族の身に起こったことを話し始めると, 会場はしーんと静まり返った. 「どんという音が地震であるとは思わなかった」「以来我が家では, 家族全員が呼び笛を携帯することにした」と話す語り部達に, 研究者からは質問が浴びせられた. 実際にそのような大きな地震を自ら体験している研究者は稀である. 地震が起こった時の現象とはどのようなもので, その瞬間人々はどのように行動し対処したか, ということに強い関心をもったようであった. 地震に見舞われた直後の台湾から参加した研究者は, 学問と政治両面からの国際協力の必要性をつよく訴えられたが, 研究をどのように社会へ還元し自然災害の軽減に役立っているのかについて, 地震という共通の脅威をもつ人間達が悩みを語り合い, 助け合う道を模索し合った, という感想を抱かされたプログラムだった.

通訳にあられたボランティアの方が見事だった. 地元



図 9. デモンストレーション (ジオスライサー実演)

の医師でまだ 40 歳そこそこの方が、後で伺ったところ、中学、高校の時期をアメリカで過ごしたとのことだった。期間中会場にほぼ詰め通しだったこの方の存在も、他の町民ボランティア同様、今回の会議運営の大きな原動力だった。

6. 地層抜き取り装置 (ジオスライサー) の実演 (1 月 22 日)

この日の昼には、セミナーハウス近くのフィールドで、(株) 復建調査設計の原口強さんによる地層抜き取り装置のデモンストレーションも行われていた。昼食もそこそこに私も会場へ出かけてみたが、大勢の外国人で賑わっていた。地層抜き取り装置 (Geo-slicer) は、広島大学の中田教授と地震研究所の島崎邦彦教授が共同で開発したものである。どのような狭い場所でも簡単に地下の地層が採取でき、土地を使用前の現状に復することが容易な上に、自在にいろいろな方向や角度から地層を多数採取でき、剥ぎ取った標本を後でじっくり観察できることから、最近の活断層調査において盛んに用いられているものである。

7. 特別講演会「活断層を知る・活かす」(1 月 23 日)

そして今日は日曜日。早いもので、明日から 3 日間の中央構造線エクスカージョンに出かける外国人を除く多くの参加者にとっては、いよいよこの日がシンポジウムの最終日となった。島に来てから 1 週間経つのだが、毎日様々な方に会い、このように多彩なプログラムをあちこち移動して聴き回っているのが、あっという間という感じがする。いつの間にか増えてしまったパンフレットや資料を他の荷物と共に宅配便で送り、帰り支度をすませて私が床に就いたのは、夜かなり遅くなってのことだった。

特別講演会「活断層を知る・活かす」は、入場料無料で通訳が付き、会場を再び町民センターに戻して行われた。活断層についての関心の高さを示すように多くの町民が参加したが、この会では三人の研究者が講演を行った。ここでもまた、感心させられたアイデアがある。それは、二



図 10. 参加者の記念撮影

人の外国人講演者に通訳者としてそれぞれのお弟子さんを配したことである。Dr. Yeats に堤さん、Dr. Schwartz には遠田さんと奥村先生が付いたために、単なる通訳にとどまることなく、一般の聴衆には不足の地震学的、地質学的知識を恩師の話に補ってうまく解説しておられた。あうんの呼吸と言うのか、こんなところにもまた、人の交流がうまく生かされていた。いずれの方達も一般への普及講演であることを良く理解されて、非常に分かりやすく活断層についての基礎的な知識や地震のお話をしてくださった。

セミナーハウスでは、この日の午前中も、尽くしきれなかった議論に多くの研究者が集まっていたようである。

振り返って

登録をし、全期間を通して参加しなければ、この会議がどれほど良くアレンジされ、運営されたものであったかを十分に理解できなかったかもしれない。世界の活断層研究やその社会との関わりを研究者、学生、行政者、一般市民と共に学んだ貴重な場であると同時に、私にとってははからずも、シンポジウムをお世話する側のお手本を見せていただいたような大変貴重な機会となった。

中田先生や奥村先生は、会場では討論の司会から通訳、事務的なアナウンスに至るまでを行って一人何役もこなされ、またホテルに戻ってまでもいろいろなお世話に追われておられたが、ほんとうにお疲れだったことと思う。そんな中でもお二人は絶えず一人一人の参加者に声をかけ、気を配っておられた。閉会式に出席せず、1 日早く帰途についた私に後日 Certificate (終了証書) が送られてきた時には、行き届いた配慮にあらためて敬服する思いだった。広島大学、京都大学の助手や学生の方々、町民ボランティアの方達も献身的に実に良く働かれた。このような大会議の運営には概して騒々しさがつきまとうものだが、全てが非常に静かに進行し、おかげで参加者は整えられたゆったりとした環境の中で講義を聴いたり生活することができたの

である。事務局の方達の統率のとれた動きからは、普段の意思疎通の良さを垣間見た。

この稿を書くにあたり、私は奥村先生にマネジメントの秘訣やご苦労話などをお尋ねした。そして知ったのだが、先生が以前におられた工業技術院地質調査所国際室では研究者にも1年間の事務学習が義務付けられていたそうである。また、1992年に京都で開催されたIGCの時にも世話人として働かれるなど、先生はすでにマネジメントの経験を積んでおられた。それらの経験は、とくに今回、海外からの参加者の渡航事務を行うにあたって大きく生きたという。奥村先生がこの国際会議を立案し、中田先生と計画を作成したのが5月、海外の友人たちに招待状を送ったのが7月、返事が届いたのが9月から10月にかけてで、それからの2ヶ月というものはほんとうに大変だったとおっしゃっていた。11月から12月には、1日実に100件ものメールを処理される毎日だったそうである。英語と研究・実務の両面に長けた方だから可能だったことではあるが、地震研究所でもこのようなスタッフを養成したり、人々の心に残る会を提供できたらと考えつつ過ごした日々だった。

残念に思えたことが私にはひとつだけある。それは、この会議に地元兵庫県の小中高校生の姿が見られなかったことである。体験した大地震について、現場で世界一流の研究者の生の講演を聞いたりディスカッションの光景を目にすることができる稀な機会である。先生が引率して、ぜひこの雰囲気に触れさせて欲しかった。若い世代へ何よりの

啓発の場になったに違いない。

「Hokudan-2000」は、人の和のすばらしさをもあらためて感じさせてくれた。成果を求めるだけではなく、中田先生や奥村先生らしいアイデア、暖かさが随所に満ちたほんとうに楽しいシンポジウムであったと思う。

謝辞：会議からほぼ5ヶ月経ってやっと参加者に礼状を書き終えたばかりという奥村先生にお話を伺い、写真をご提供いただきました。北淡町教育委員会の川吉知子さんもたくさんの写真をご提供くださいました。また、地震研究所から一緒に参加した遠田さんには私の記憶のあやふやなところを補っていただきました。島崎先生には原稿をお読みいただきました。同行した元大阪断層資料センターの渡邊貴美子さんとの会話も参考になりました。多くの人にすばらしいシンポジウムを提供された広島大学中田 高教授、奥村晃史助教授、見事なチームワークで会を成功に導かれた助手の方々、広島大学、京都大学の学生達、北淡町の方々に敬意を表すとともに、厚くお礼を申し上げます。

参 考 文 献

Active Fault Research for the New Millenium (Proceedings of the HOKUDAN International Symposium and School on Active Faulting), 2000, edited by K. Okumura, K. Takada and H. Goto, 606 pp.

月刊地球特別号, 2000. (in press)

奥村晃史, 2000. 日本地震学会広報誌「なるふる」, No. 19, 1-3.

遠田晋次, 2000. 日本地震学会「ニューズレター」, 11, No. 6, 23-25.